といつたので、おかあさんも、やつとおわかりになつた。

御飯の時、おかあさんが、おとうさんに、

「けさは、子どもたちが早く起きて、朝御飯の支度からお座のさうぢまで、私の知らないうちに、すつかりしてくれたのですよ。」

とおつしやると、

「それは、えらい。感心なことだ。」

とおほめになつた。

その夜、みんなが集つてゐる時、一郎さんが、お座敷の眞中に立つて、

「ただ今から、母の日のお祝ひをいたします。初めに、ぼくが綴り方を讀みます。」

といつて、綴り方を讀んだ。題は、「ぼくのおかあさん」といふのであつた。

私は國語の「水族館」を讀んだ。それからねえさん

昭和二十一年四月九日　翻刻印刷
昭和二十一年四月三十日　翻刻發行
（昭和二十一年四月九日文部省檢定濟）

初等科國語三（第四學年前期用第二分冊）
定價　金參拾五錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

Approved by Ministry of Education (Date Apr. 9, 1946.)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社

發行所　東京書籍株式會社

「おしまひに、おかあさんに記念品をさしあげます。」

といつたので、おかあさんは、

「何をいただくのでせう。」

とにこにこなさつた。

一郎さんが、一枚の繪をさしあげた。

「おやおや、おかあさんをかいてくれましたね。これはありがたう。一郎さん。」

次に、私が、自分でこしらへた前掛をあげた。おかあさんは、それをちよつとお當てになつて、

「よく似あひますね。かはいいぬひとりだこと。」

とおつしやつた。最後にねえさんは、ひもであんだきれいな買物袋をさしあげた。

「これは、いいものをもらひました。毎日の買物に持つて行きませう。」

と、うれしさうにおつしやつて、おとうさんにお見せになつた。

おとうさんは、

「これはこれは。今日はいい日だつたね。」

と、おかあさんにおつしやつた。

二十三　みにくいあひるの子

わなかは、いいお天氣であつた。麥畠は黃色く、からす麥はみどりであつた。野原には、かれ草が積みあげられ、こうの鳥は、長い、赤い足をして、歩きまはつてゐた。

畠や野原のまはりには、大きな森があり、森の中には、深いみづうみがあつた。

みづうみの、ごぼうの生えてゐる高いところに、一羽のあひるがすわつてゐた。それは、卵をかへしてゐるのであつた。けれども、親あひるはひなが出て來る前に、

もうつかれきつてゐた。それに、たづねてくれるものも、まれであつた。ほかのあひるどもは、ごぼうの下にすはりこんでゐるよりは、みづうみでおよぎまはる方がすきであつた。

とうとう、一つ、一つと卵がわれた。「ぴいよ、ぴいよ。」と、どの卵からも、小さなひなのくびが、つき出してゐた。

「があ、があ。」と、親あひるがいふと、ひなたちは、すぐとび出して來た。さうして、みどりの葉の下で、まはりを見まはした。みどりは、目のためにいいから、親あひるは、見たいだけ見させてやつた。

「世界は、廣いものだなあ。」

と、ひなたちはいつた。

「これが世界だと思つてゐるのかい。世界は、庭の向ふがはで、ひろがつてゐるのだよ。さあ、みんなそろつただらうね。」

といひながら、親あひるは立ちあがつた。

「いや、みんなではない。一ばん大きな卵が、まだ殘つてゐる。いつまでかかるのだらう。私は、もう、はんたうにくたびれた。」

といつて、腰をおろした。

「どうだね。どんなふうだね。」

と、たづねて來た年よりのあひるがいつた。

「あの一つの卵に、長くかかるのですよ。こはれないのです。ちよつと見てください。なんときれいなあひるの子ではありませんか。みんな父親に似てゐますよ。」

「その、こはれないといふ卵はどれかね。」

と、年よりのお客さんがいつた。

「これは、きつと七面鳥の卵だよ。私も一どそんなふうに、だまされたことがあつてね。そのひなたちには、しんぱいも、くらうもしました。なにしろ、水をこはがるのだから、どんなにしても、思ひきつて、はいるやうにしてやることができなかつたよ。私は、くわつ、くわつともなき、こつ、こつともいつておしへ

たのだが、だめだつた。卵を見せてごらん。さうだよ、それは七面鳥の卵だよ。そんなものは、ほつておいて、ほかの子どもに、およぐことを敎へてやるがいいよ。」

「でも、もうすこし、だいてみませう。今までだいてゐたのだし、あと、四五日はすわることもできますから。」

「それは、ごかつてに。」

年よりのあひるは、さういつたまま、どこかへ行つてしまつた。

それから二三日して、とうとう、その大きな卵がさけた。「ぴいよ、ぴいよ。」と、ひなはいつて、はつて出た。それは、ひどく大きなからだで、たいへんみにくいものであつた。

親あひるは、じつと、その子をながめた。

「これは、また、ひどく大きなひなだ。ほかのものは一羽だつて、こんなすがたをしてゐない。ほんたうに、七面鳥のひなかしら。なにしろ水に入れてやらなければならるまい。」

あくる日は、いいお天氣で、太陽は、ごぼうの上を照らしてゐた。親あひるは、そのひなを、みんなつれて、水のところへおりて行つた。さつと音をたてて、水の中へとびこんだ。「くわつ、くわつ。」といふと、ひなたちも、一羽づつとびこんだ。水は、ひなたちの頭の上を流れたが、すぐに浮び出て來て、うまくおよいだ。みにくいあひるの子も、いつしよになつておよいだ。

「いや、七面鳥ではない。」

と、親あひるはいつた。

「あのうまく足を使ふやうす、あのしせいのいいのを見てもわかる。これは、私の子だ。見るものの目のつけどころさへよければ、きれいな子なのだ。くわつ、くわつ。私についておいで。大きな世界の鳥小屋へつれて行つてあげるからね。だが、私のそばにくつついてね。人にふまれないやうに、ねこに氣をつけて。」

そこで、みんなは、鳥小屋を見にでかけた。そこには、

二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことで、あらそつてゐた。さうして、親あひるにつれられたひなたちが、通つて行くと、一羽の鳥が、

「あれを見るがいい。あの、あそこにゐるあひるの子だよ。なんといふかつかうなんだらう。」

といふと、もう一羽の鳥が、とんで來て、そのみにくいあひるの子のくびすぢにかみついた。

「ほつておいてください。だれにも、わるいことをしないのですから。」

と、親あひるがいつた。

「あんまり、大き過ぎて、みつともないから、まあ、かみつきたくなるんだよ。」

年よりのあひるは、

「あの一羽をのぞいたほかは、みんないい子だ。あれだけは、しくじつたね。」

といつた。すると、親あひるは、

「あれは、美しくはありませんが、たちは、ほんたうにいいのです。それに、ほかのものと同じやうにおよぎます。ほかのものよりうまくおよぐといつても、いいぐらゐなのです。大きくなれば、きつと、美しくもなるでせう。卵の中にあんまりながくゐたので、あたりまへにできてゐないのです。」

といつて、かばつた。

みにくいあひるの子は、あひるの仲間から、わる口をいはれるばかりでなく、にはとりからも、打たれたり、つつかれたりした。七面鳥は、ほに風をうけた舟のやうに、からだをふくらませて、向つて來た。「があ、があ。」といつて、顔をまつかにしてやつて來た。

あはれなあひるの子は、立つてゐた方がいいか、歩いてゐた方がいいかさへも、わからなかつた。すがたがみつともないばかりに、みんなから、しかりとばされるので、しみじみとなさけなく思つた。このやうにして、初めの日は過ぎた。

「おまへなんかは、ねこに食はれてしまへばいい。」

といはれた。親あひるですら、

「遠いところにゐてくれさへすればいい。」

といつた。

かうして、あひるにはかみつかれ、にはとりにはこづきまはされ、ゑさをくれる娘には、足でけとばされた。そこで、みにくいあひるの子は、かきをとび越えて、逃げ出した。すると、草むらにゐた小鳥が、恐れて飛びたつた。

「これも、自分がみつともないばかりに——。」

と、あひるの子は思つた。さうして、目をふさいだ。が、またさきへとんで行つた。

かうして、大きなぬまのあるところへやつて來た。そこには、かもが住んでゐた。あひるの子は、ここで、一晩横になつた。つかれて、氣が沈んでゐた。

朝がた、かもがとび起きた。さうして、新しい仲間の

「おまへさん、おまへさんはよほどみにくいね。」

と、かもがいつた。

あひるの子は、このあしの間で、横になつてやすみたいと思つた。また、ぬまの水を飲ませてもらひたいとも思つたが、それも許してもらへさうもなかつた。

それから三日間、ここでそつと、かくれてゐた。

すると、そこへ、二羽のがんがやつて來た。どちらも、卵からはひ出してから間のないものであつた。

「おい、きみ。」

と、その一羽がいつた。

「きみは、じつにみにくいから、氣に入つたよ。どうだ、われわれといつしよにでかけて、渡り鳥になる考へはないかね。きみは、みつともないから、いいしゐはせにであふかも知れないよ。」

この時である。「ぽん、ぽん。」と、空でなつた。さうして、二羽のがんは、ぬまの中に死んで落ちた。「ぽん、

ぼん。」と、またなつた。

がんのむれは、そろつて、あしの間から飛びたつた。また、音がひびいた。ものすごい鳥うちが、はじまつてゐたのである。

かりうどは、ぬまのまはりに、待ちぶせをしてゐた。あしの上にひろがつてゐる木の枝にも、すわつてゐた。青いけむりが、暗い木の間から、雲のやうにたちあがつた。

かり犬が、びしやつ、びしやつと、ぬまぢへはいつて來た。

あはれなあひるの子は、きもを、つぶした。頭をねぢ曲げて、それを、つばさの中に入れた。ところが、ちやうどその時、恐ろしい大きな犬が、そのすぐそばに立つてゐた。したは口からたれて、目はみにくく光つてゐた。鼻をあひるの子のそばにつきつけて、歯をむいた。それから、びしやつ、びしやつと、どこかへ行つてしまつた。

「ああ、ありがたい。」

あひるの子は、ためいきをついた。

「自分がみにくいので、犬もかみつかうとしない。」

しばらく、じつと、靜かにしてゐた。その間も、たまの音は、あしの間になり響き、鐵ぱうはひきつづいて火ぶたをきつた。日の暮になつて、やつと、ひつそりした。しかし、あはれなあひるの子は、起きあがる氣にもなれなかつた。いく時間もたつてから、やうやくあたりを見まはし、それから、できるだけ早く、ぬまぢの外へ逃げて行つた。野や草原を越えて、どんどん走つて行つた。あらしが、吹きまくつてゐたので、一つのところから、ほかのところへたどりつくには、たいへん骨が折れた。

暮れがたになつて、あひるの子は、ある、小さな、まづしい農家の小屋へやつて來た。小屋はひどくあれてゐて、どつちへ倒れるかわからなかつた。風がひどいので、あはれなあひるの子は、ひどくあれてゐた。

くなつて來た。

あひるの子は、小屋の入口の戸が、すこし開いてゐるのを見つけたので、そこから、中へはいて行つた。

中には、一人の女が、ねことにはとりと、いつしよに、住んでゐた。ねこは、ソニイといつて、せ中を丸くしたり、のどをならしたり、火花を出すことさへできた。にはとりは、足の短い、こびつちよといふ名で、いい卵を生んだ。女は、このねことにはとりを、自分の子のやうに、かはいがつた。

朝になつて、よそから來たあひるの子は、すぐに見つけられた。ねこはのどをならし、にはとりは、こつ、こづとさわいだ。

「なんだらう。」と、女は、ふしぎに思つて、あたりを見まはした。けれども、よく見えなかつたので、どこからかまよひこんだ、ふとつたあひるだと思つた。

「これは、たいしたまうけものだよ。これからは、あひるの子は、三週間ばかり、ためしにおいてもらつた。しかし、卵を生まなかつた。そればかりでなく、ねこやにはとりとは、まつたくちがつた考へを持つてゐた。

にはとりは、

「おまへさんは、卵を生むことができるかい。」

と、あひるの子にたづねる。

「いいえ。」

「ぢや、お願ひだから、口を出さないでほしいね。」

すると、ねこがいふ。

「おまへさん、せなかをまるくしたり、のどをならしたり、火花を出したりすることができるかい。」

「いいえ。」

「それなら、かしこい人たちがものをいつてゐる時あ、かつておいてみよう。」

と、女がいつた。

に、自分の考へなどは、いへないのだよ。」

それで、あひるの子は、すみつこにすわつてばかりゐた。そこへ、さわやかな空氣と日の光が流れて來た。あひるの子は、急におよぎたくなつたので、にはとりに、思はずその話をした。

「おまへさん、なにを考へてゐるの。」

と、にはとりはさけんだ。

「おまへさんは、することがないから、そんなことを心に考へるのだよ。のどをならすか、卵を生みなさい。さうすれば、そんなことは考へなくなつてしまふよ。」

「でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからねえ。それに、水の下へもぐつて、底へ行くと、それは、さつぱりしますよ。」

「おまへさん、氣がくるつたのだよ。ねこに聞いてごらん。水の上をおよいだり、もぐつたりするのが、いい氣持か、どうか。それから、うちのおばあさんに聞いてごらん。世界中で、あの人ほどりかうな人は、ありはしないから。」

「あなたは、私のいつてゐることが、おわかりにならないのです。」

「おまへさんのいふことが、わからないつて。ぢや、だれにわかるのかね。私のことはいはないとしても、おまへさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは、思つてゐないだらうね。うぬぼれてはいけないよ。人がじんせつにしてあげる時は、喜ぶものですよ。暖かなへやにはいつてさ、ものごとを教へてもらへる人たちの仲間入りをしたんだもの。それなのに、おまへさんは、口數が多過ぎる。だから、おまへさんとおつきあひするのがいやなのさ。ほんたうですよ。ためを思つていつてゐるのですよ。いやなことをいふやうだが、それは、いい友だちは、みなさうしたものだよ。まあ卵を生むか、のどをならしたり、火花を出すことを、せい出して、勉强するのだね。」

「私は、廣い世界に出たいと思つてゐるのです。」

「どうぞ、かつてにおいでよ。」

そこで、あひるの子は、でかけて行つた。さうして、およいだり、もぐつたりした。けれども、すがたがみつともないので、いろいろな動物たちから、のけものあつかひにされた。

秋が來た。森の木の葉が、こがね色や、茶色になつた。雲は、あられや雪で重くなつて、低くたれてゐた。

ある夕暮、太陽が美しくしづむ時であつた。草むらから、大きな、りつぱな一むれがやつて來た。まぶしいほど白い鳥で、長くて、よく曲るくびを持つてゐた。それは、白鳥であつた。白鳥は、みごとな羽をひろげ、この寒い國から、暖かい國、廣いみづうみへと飛んで行つた。高く高くのぼつて行つた。あひるの子は、それを見て、ふしぎな氣持になつた。あひるの子は、水の上を、車のやうにくるくるまはり、そのくびを白鳥の方にさしのべ、自分でもおどろくほど、へんな、大きな聲を出した。あひるの子は、あの美しい、しあはせな白鳥を、忘れることはできなかつた。さうして、白鳥たちが見えなくなると、すぐ、水のどん底まで、もぐつて行つた。

あひるの子は、あの鳥の名も、どこへ飛んで行つたのかといふことも、知らなかつた。しかし、今までに、だれをなつかしく思つたよりも、あの鳥をなつかしがつた。けつして、うらやましく思つたのではない。どうして、あの鳥の持つてゐるやうな美しさを、持つたらなどと望まれよう。

そのうちに、寒い冬が來た。あひるの子は、水のおもてが、すつかりこほつてしまはないやうに、水の中をおよぎまはらなければならなかつた。しかし、一晩ごとに、そのおよぎまはるあなが、だんだん小さくなつて行つた。あひるの子は、あながこほつてしまはないやうに、いつも足を使つてゐなければならなかつた。とうとう、つかれはてて、氷の中にとぢこめられたまま、身動きもせず、倒れてしまつた。

よく朝、早く、一人の農夫が來かかつた。あひるの子を見つけて、木ぐつで氷をくだき、うちへつれて歸つた。すると、あひるの子は、生きかへつた。子どもたちは、いつしよに遊ばうとしたが、あひるの子は、またいぢめられるかと思つて、恐ろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。たちまち牛乳が、へや中に流れたので、おかみさんは、手をたたいておこつた。そこで、あひるの子は、バターを入れてあるたるの中へとびおり、こんどはまた、こなをけにはいつてしまつた。おかみさんは、聲を張りあげ、火ばしであひるの子を打つた。子どもたちは、あひるの子をつかまへようとして、ころげまはつて、笑つたりさけんだりした。うんよく、その戸が開いてゐたので、あひるの子は、雪の中の草むらへばいりこんだ。そこで、つかれきつて、横になつてゐた。

あひるの子が、きびしい冬の間、どんなに苦しんだか、ここで話をすることは、あまりにかはいさうである。

太陽が照りはじめ、ひばりが歌ひ出した時、あひるの子は、ぬくの草むらの中で、横になつてゐた。美しい春であつた。

すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。前より強く空氣を打ち、飛ぶことができた。どうして、こんなになつたのかわからないうちに、大きな庭の中に來てゐた。そこには、にはとこの木がかんばしくにほひ、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびてゐた。ここは、ほんたうにきれいで、春の喜びがみちあふれてゐた。

ところが、木のしげみから、二、三羽の美しい白鳥があらはれて來た。白鳥は、つばさをさらさらとならし、輕く水の上をおよいでゐた。あひるの子は、そのみごとな鳥を知つてゐた。さうして、なんだか悲しい思ひが、こみあげて來た。

「私は、あのけだかい鳥のところへ飛んで行かう。私のやうなみつともないものが、おくめんもなく近づいて行くのだから、殺されるかも知れない。しかし、か

まはない。仲間に追ひかけられたり、にはとりに打たれたり、女の子につきのけられたり、冬中ひもじい思ひをしたりするよりは、あの鳥に、殺された方がましだ。」

さういつて、水の中にとびこみ、白鳥の方におよいで行つた。

白鳥は、あひるの子を見た。さうして、羽をひろげて、ゆつたりと近づいて來た。

「――。」

あばれなあひるの子は、殺されるものと思ひながら、水の上に、頭をたれた。そのとたん、すみきつた水の上に、自分のすがたのうつてゐるのを見た。それは、ぶかつかうな、みつともないあひるの子ではなかつた。白鳥であつた。

生れが、白鳥の卵であつてみれば、あひるの小屋に生れても、さしつかへはない。白鳥は、その受けて來たまづしさとふしあはせとを、かへつて喜んだ。今は、そのとつたのである。

大きな白鳥たちは、そばへおよいで來て、くちばしで輕くなでてくれた。

小さな子どもが來て、水に、パンや、麥を投げてくれた。一ばん小さい子どもが、

「あすこに新しいのがゐるよ。」

とさけんだ。するとほかの子どもたちも、

「さうさう、新しいのが來た、來た。」

と喜んだ。子どもたちは、手をたたいて、おどりまはつた。おとうさんや、おかあさんのところへ、走つて行つた。パンやおかしを投げてよこした。みんなは、

「新しいのが、一ばんきれいだ。」

といふと、年をとつた白鳥が、新しい白鳥の前に來て、頭を下げた。新しい白鳥は、すつかりはち入つてしまつた。どうしていいのかわからないので、つばさの中に頭をかくした。ほんたうに幸福であつたが、すこしもいば

らなかつた。そのむかし、いぢめられたり、あざけられたりした時のことを考へた。それが、今では、すべての鳥の中で、一ばん美しいといはれる身の上になつたのである。にはとこの木でさへ、新しい白鳥の前に枝をかがめた。太陽は、暖かくおだやかに照らした。すると、つばさが、さらさらと音をたてた。わかい白鳥は、そのほそながいくびをあげて、心の底から喜ばしさうにさけんだ。

「私が、まだ、みにくいあひるの子であつた時、こんな幸福があらうなどとは、ゆめにも思はなかつた。」

昭和二十一年八月十三日　翻刻印刷
昭和二十一年九月十一日　翻刻發行
（昭和二十一年八月十三日文部省檢定濟）

初等科國語三　第四學年用（第三分冊）〔檢〕

定價　金貳拾五錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

翻刻發行　東京都小石川區久堅町一〇八番地
翻刻印刷者　日本書籍株式會社
代表者　木村淵之助

Approved by Ministry of Education (Date Aug. 13, 1946.)

印刷所　東京都小石川區久堅町一〇八番地　日本書籍株式會社

發行所　東京都小石川區久堅町一〇八番地　日本書籍株式會社